

# 色丹島鳥類調査報告

あおき・のりゆき  
昭和40年島根県大社町生まれ。  
根室市在住。  
日本鳥類標識協会会員、環境  
省タンチョウ保護増殖委員会  
ワーキンググループ委員、環  
境省シマフクロウ保護監視員。

青木 則 幸

本文のねらい・要旨

色丹島は北方四島でエトロフ島、国後島に次ぐ三番目に大きな島で、北岸の穴間、斜古丹の二カ所に集落がある人口約三〇〇〇人の島である。島全体が丘陵地になっており、島北東部にある斜古丹山が標高四一三mで最高峰になる。この色丹島において二〇〇一年六月二六日から七月三日にかけて北海道新聞社北海道放送の主催により色丹島・植物と鳥類専門家交流が行われ、その鳥類班の一員として参加する機会に恵まれたのでこの場を借りて報告を行う。

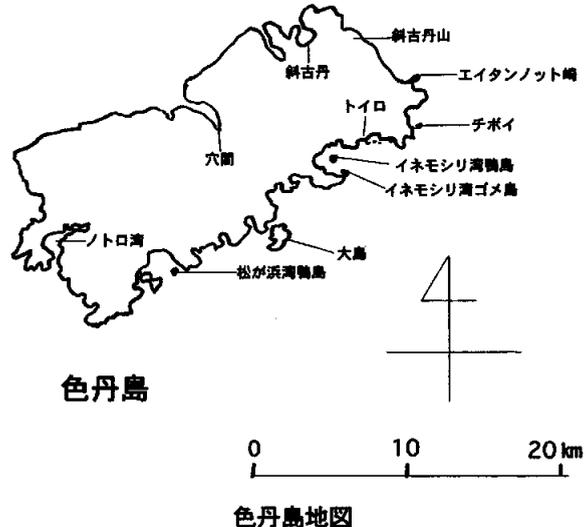
## 調査方法

調査は植物班、鳥類班の二班に分かれ行った。植物班は陸路を用いて植物相の調査を主に、我々鳥類班は、色丹島穴間より船（コーラルピース）で色丹島東岸から南岸を回り、鳥の生息状況を調べた。海鳥コロニーではゴムボートにより海上カウントを行ったほか、上陸可能だった地点（ウミスズメ島、トイロ東島（仮称）、イネモシリ湾鴨島、松が浜湾鴨島）では、上陸して海鳥コロニーの状況を調べた。船で移動中も可能な限り船上よりチシマウガラス、ウミガラス、ウミスズメ、ケイマフリ、ウトウ、エトピリカに関しては個体数カウントを行った。また穴間周辺を含め、上陸した地点では陸鳥を含めた鳥類の生息状況を調べた。この調査には今回の調査団の団長でもある高田勝氏、クリリスキー自然保護区長のグリゴリエフ氏、私の三人があたった。

## 調査結果

### 〈海鳥類〉

今回はエイタンノット崎、トイロ周辺、イネモシリ湾、松が浜湾、ノトロ湾で調査を行った。色丹島で最も多く繁殖すると思われる海鳥類はウトウであり、今回の調査範囲のみで一〇〇〇〇羽以上が生息することが巣穴の数より推定された。その大部分は松が浜湾の鴨島に生息していた。次に多いのがエトピリカで総カウント個体数が約四六〇羽であった。しかしこの時期がエトピリカの抱卵期にあたること、沖で餌をとっている個体がいることから総個体数は一〇〇〇―二〇〇〇羽が調査繁殖地で生息すると推定された。三番目に多いのはケイマフリであり総カウント数は約二八〇羽であるが沿岸性が強い船からのカウントだけでは、個体数を推定することは難しいと思われる。



色丹島出現鳥類リスト

ミズナギドリ科

フルマカモメ  
ハシボソミズナギドリ

ウミツバメ科

コシジロウミツバメ

ウ 科

ウミウ  
ヒメウ  
チシマウガラス

シギ科

オオジシギ  
ヤマシギ

ガンカモ科

スズガモ  
シノリガモ

ワシタカ科

トビ  
オジロワシ  
ノスリ

カモメ科

ウミネコ  
オオセグロカモメ

ウミスズメ科

ウミガラス  
ケイマフリ  
ウミスズメ  
ウトウ  
エトピリカ

ハト科

キジバト

ホトトギス科

カッコウ  
ツツドリ

アマツバメ科

アマツバメ

キツキ科

アカゲラ  
コゲラ

ヒバリ科

ヒバリ

ツバメ科

ショウドウツバメ  
イワツバメ

セキレイ科

ハクセキレイ  
ビンズイ

ミソサザイ科

ミソサザイ

ヒタキ科

コマドリ  
ノゴマ  
ルリビタキ  
ノビタキ  
アカハラ  
ウグイス  
エゾセンニュウ  
シマセンニュウ  
マキノセンニュウ  
メボソムシクイ

シジュウカラ科

コガラ  
ヒガラ  
シジュウカラ

ゴジュウカラ科

ゴジュウカラ

ホオジロ科

アオジ  
オオジュリン

アトリ科

カワラヒワ  
マヒワ  
ウン

ハタオリドリ科

スズメ

カラス科

ハシボソガラス  
ハシブトガラス

計 54 種

ることにより、その総個体数は、エトピリカを上回る可能性もある。コシジロウミツバメはウミスズメ島において営巣を確認できたものの典型的なコシジロウミツバメの巣穴は発見できず厚岸町の大黒島のような大規模なコロニーは存在しないと思われる。今回北方四島で、戦後初の繁殖が確認されたウミスズメはそれと思われる巣穴はウミスズメ島でしか見ることが出来なかったが、巣穴の数から考えてこの島だけで二〇―三〇番が繁殖している可能性がある。北海道東部で個体数の多いオオセグロカモメは、エイタンノット崎以外では大きな群を見ることはなかった。繁殖が期待されたウミガラスは今回海上で二羽が確認されたのみであった。チシマウガラスはトイロとエイタンノット崎に小規模なコロニーが見られただけであった。

また北海道東部で多く繁殖するウミウは、エイタンノット崎、トイロ、松が浜湾鴨島、イネモシリ湾でそれぞれ十巣が確認されたのみであった。今回調査が行えなかったチボイ周辺、大島、穴間周辺でもウミスズメ類をはじめとする海鳥類が繁殖するという情報があり、今後の調査が望まれる。

また六月二六日に国後島と色丹島の間の海上でハンボンミズナギドリとコオバシギを確認した。

〈陸鳥〉

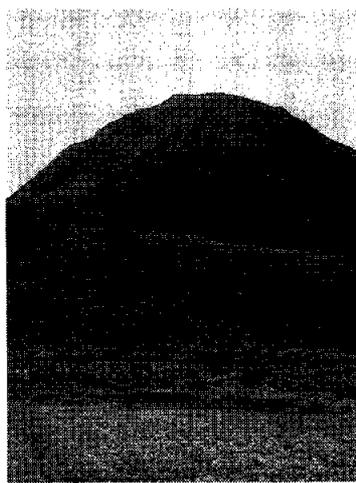
北海道東部の低地の鳥類相との最も大きな違いはメボソムシクイが色丹島では最優占種となっていることである。色丹島は最高標高が四〇〇mほどであるが、標高〇mから針葉樹林が有ればどこにでも生息していると思われる。この鳥は北海道では知床山脈の標高およそ一〇〇〇mの針葉樹林

帯に生息しているのみである。この鳥と近縁のセングイムシクイとエゾムシクイは北海道では多く見られるが、今回の調査では全く確認できなかった。北海道東部の低地樹林で最優占種となっているアオジは分布範囲は広いものの、個体数は比較的少なかった。

色丹島で繁殖するとされ北海道東部では見られない、シマゴマに関しては、今回確認することが出来なかった。

日本全国で普通に見られるトビは非常に少なく今回確認できたノトロにのみ生息するという情報が得られた。

今回は確認できなかったがノトロ湾にシマフクロウが生息するという情報が地元保護区の職員より得られた。



斜古丹山

調査日程と各調査地の概要

〈穴間沖〉

六月二六日穴間入港直前に穴間湾の西の海岸沿いを通過した。穴間湾の外側の海岸線は断崖が続き、その下の崩落地でケイマフリが繁殖していると思われる。またウトウ、エトピリカは、穴間湾

外側の西にある小島で繁殖している可能性がある。霧はなく視界は良好だった。

- ケイマフリ 約三〇羽
- ウトウ 六羽
- エトピリカ 三羽

〈穴間〉

色丹島に到着した六月二六日と、調査出発の翌日二七日及び調査より戻った七月二日と翌日の三日に色丹島穴間に滞在し、そこで出現した鳥類をそのつど記録した。ラインセンサス等の特別な調査は行わなかった。

〈穴間―エイタンノット崎〉

六月二七日七時四〇分穴間を出航後エイタンノット崎に向かう途中船場より海上カウントを行った。穴間からエイタンノット崎の海上は濃霧で視界が五〇―一〇〇mほどしかなかったため、十分な調査が行えたとは考えられない。以下出現鳥類とその個体数。

- フルマカモメ 四羽
- チシマウガラス 四羽
- オオセグロカモメ 一羽
- ウミガラス 一羽
- ウトウ 一羽
- エトピリカ 一羽

〈エイタンノット崎〉

エイタンノット崎周辺も濃霧であったが、ゴムボートで海鳥類の繁殖地へ向かった。ここには上陸可能な岩礁が無いためゴムボート上からの目視調査のみを行った。ここでの優占種はオオセグロ

カモメであり二一三〇羽が確認された。またウミウの巣が十巢、チシマウガラスの巣が三五巢見つかつた。上陸できなかったのがケイマフリ、エトピリカ、ウトウの繁殖は確認できなかったが、周辺海域で姿を見ることは出来たので繁殖している可能性は高い。周辺海域で確認された鳥類は以下の通りである。

約十巢

ウミウ

チシマウガラス 約八〇羽 三五巢

オオセグロカモメ 二一三〇羽

ウミガラス 一羽

ケイマフリ 約二〇羽

ウトウ 確認は出来たが、カウント

エトピリカ 濃霧のためカウントできず。

二一三〇番が繁殖している

と思われる。

〈エイタンノット崎トイロ〉

この区間でも海上カウントを行ったが、濃霧のため視界が五〇—一〇〇mしかなかった。この区間には今回調査出来なかつたチボイ沖の離島にウミスズメ類の繁殖コロニーがある。周辺海域で確認された鳥類は以下の通りである。

フルマカモメ

オオセグロカモメ

ウミスズメ 六羽

ウトウ 二五羽

エトピリカ 三〇羽

〈トイロ〉

六月二十七日の午後と翌二十八日の午前中にトイロ

対岸のウミスズメ島に上陸し海鳥コロニーの調査にあつた。ここで繁殖が確認されたのはコシジロウミツバメ、オオセグロカモメ、ウミスズメの三種のみであつたが、ケイマフリとエトピリカも巢への出入りが確認されたため繁殖するものと考えられる。ここでのウミスズメの繁殖確認は北方四島全体で戦後初めてであり、ハマニンニクとスゲの優先する緩斜面で二巢が抱卵中（二巢とも二卵）で他に発育の進んでいない放棄卵が、二巢で計三卵見つかつた。抱卵中の成鳥二羽には環境庁リングを装着した。また使われていないウミスズメのものと思われる巣穴が多数発見された。またウミスズメのものと思われる巣でコシジロウミツバメの抱卵が確認された。エトピリカのものと考えられる巣穴は、今回の調査中この島でのみ緩斜面でも確認された。オオセグロカモメはわずかに卵と巣が見つかつたが後日この島の対岸のトイロの海岸でたき火の跡とともに卵殻が見つかつており、人が上陸して卵を採集したため繁殖に失敗したと考えられた。

トイロ沖にはいくつもの岩礁があるが、トイロより西の二カ所の岩礁でチシマウガラス四五巢、ウミウ約十巢が確認された。ウミスズメ島以外にもう一カ所トイロの東にある小島（仮称トイロ東島）にも上陸可能であつたが、島の上部に行くことはできなかった。この島の外周の断崖でエトピリカとケイマフリの巣穴への出入りが見られた。この島の周辺海上ではエトピリカ三羽を確認した。この島も含め上部の植生がハマニンニクの優先する草地になっている岩礁がいくつか存在するので、ここではウミスズメ類が繁殖していると考えられる。

六月二十八日早朝にトイロに上陸しキャンプ泊を行い、周辺を散策し生息鳥類の調査を行った。またカスミ網を張り、シマセンニュー成鳥二羽を捕獲し、環境庁リングを装着した。トイロをはじめとする色丹島南岸の植生は草本類に関しては根室市の太平洋岸の植生によく似ているが、木本に関しては、ヤナギ、ナラ、ニレの類が無く、針葉樹とハンノキ類が優先している。

〈イネモシリ湾鴨島〉

六月二十八日と七月一日に二回イネモシリ湾の鴨

島に上陸し海鳥コロニーの調査を行った。ハマニンニクとアザミの一種が優先する緩斜面にはウトウの巣穴が多数見られた。エトピリカの出入りしている巣穴はすべて島の外周部の断崖にあつた。

またケイマフリの巣穴への出入りも確認できた。

周辺海域で確認された鳥類は以下の通りである。

ウミウ 十巢

シノリガモ 四羽

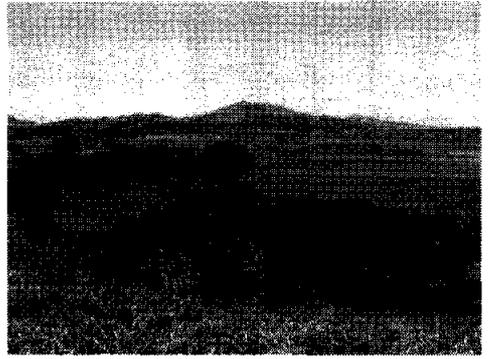
ケイマフリ 約三〇羽

ウトウ 約二〇羽

エトピリカ 約七五羽

〈イネモシリ〉

六月二十八日の午後にはトイロよりゴムボートでイネモシリに上陸し短時間ながら陸鳥も観察することが出来た。イネモシリ湾にあるもう一つの島であるゴメ島はキツネが渡れるため海鳥はほとんど繁殖していないという情報が得られたため、今回は調査を行わなかつた。また遠目にもこの島の周辺は明らかに海鳥の姿が少なかつた。



松が浜湾

〈松が浜湾鴨島〉

松が浜湾周辺は色丹島で唯一ゲイマツ（シコタンカラマツ）が自生しており、戦前は色丹島随一の景観地として有名であったところである。ここには小島と鴨島という二つの島があるが、六月三日に海鳥コロニーとなっている鴨島（標高五〇m）にのみ上陸し調査を行った。この島の上部はハマニンニクの優先する緩斜面となっており一面ウミズズメ類の巣穴が存在していたが、上部ではエトピリカを全く見ることが出来ず、上空を通過する個体もないこと、巣穴にいるウトウのヒナを確認することが出来たことによりほとんど全部がウトウの巣であると考えられた。エトピリカが出入りしている巣穴は島の外周の断崖にのみ存在していた。周辺海域で確認された鳥類は以下の通りである。

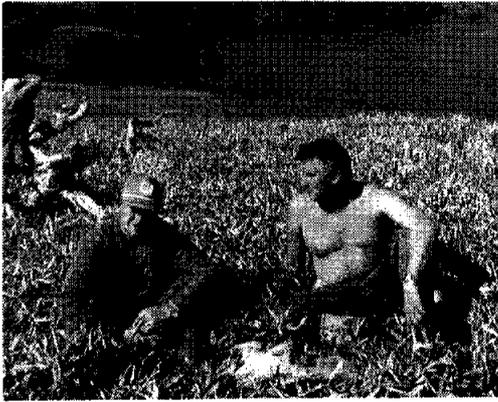
- ウミウ 二五羽 約十巢
- オジロワシ 成鳥二羽、幼鳥一羽

- ケイマフリ 約一七〇羽
- ウトウ 約五〇羽 ただし生息個体数は一〇〇〇〇羽以上と思われる。
- エトピリカ 約二五〇羽

〈ノトロ〉

ここではロシアの研究者によってタンチョウの生息確認がされているため、七月一日にポートでノトロ湾のノトロ川河口まで入った。ここには広大な干潟とヨシ原が広がり、タンチョウの生息には好適と思われるが、死角が多く時間の制限もあり個体確認は出来なかった。また北海道東部の湿地と違いカモ類、サギ類が全く見られなかったのが、違和感を感じた。周辺海域で確認された鳥類は以下の通りである。

- ウミウ 二六羽
- オオセグロカモメ 二羽
- ケイマフリ



クリリスキー自然保護区長・グリゴリエフ氏 (人物-右)

感想

今回の専門家交流では我々鳥類班の目的は色丹島の海鳥類、特にエトピリカをターゲットにして調査を行い、あわよくば捕獲してDNAサンプルを採取するというものであったが、残念ながら諸事情により、これは達成できなかった。しかし全く成果がなかったわけではない。限られた時間と濃霧の中の調査にしては、色丹島の海鳥分布と個体数の概要を把握することは出来た。これは今後の調査の指標とし非常に有益なものとなるだろう。また色丹島周辺の海鳥類の繁殖状況は、数十年前の北海道東部の状況に非常に近く、それを推定するためにも今後も継続的な調査が必要であろう。

ただ色丹島においても人為的な影響が無いわけではない。今回の調査中あちこちで人為的なものと考えられる野火や植物の盗掘の跡があった。また色丹島周辺海域でのウニやカニ、サケマスの密漁の問題もある。この密漁の問題は単に水産資源の減少に留まらず、密猟者の食料としての海鳥類やその卵の採集にもつながる。色丹島の南岸は自然保護区となっており一切の水産物の捕獲は出来ないが、それを海上で取り締まるだけの装備が自然保護区には無いという大きな問題がある。今後この地域の自然環境の保全を考えていく上でロシアと日本の協力的体制の確立が早急な課題であると思われる。

最後に今回この訪問団に参加する機会を与えてくださった北海道新聞社並びに北海道放送局、煩わしい作業をこなしていただいた事務局の方々、我々を暖かく迎えてくださった色丹島住民の皆様、に感謝の意を表す。